

日本学術振興会バンコク研究連絡センター 活動報告（2014年1月～3月）



【JSPS タイ同窓会第5回総会が開催され日本大使館より長谷川哲夫一等書記官、JSPS 国際事業部より齋藤参事が参加】

■ センター長挨拶

「バンコクの風」2014年1-3月のバンコクセンターの活動報告の発行にあたり、この報告書がカバーする期間、タイの政治・社会情勢が不安定となり、多くの皆様にご心配頂き、また励まして頂いたこと、まずはセンターのスタッフ全員に代わりこの場をお借りしてお礼申し上げます。情勢がどのように展開するのか、先行き不安定な状態が続きますが、心してセンターの運営にあたってまいりたいと思っております。

バンコクセンターが所管する国々は、アセアン諸国とバングラデシュです。その中で、JSPS 同窓会が設立されているのは、タイ、バングラデシュとフィリピンで、バンコクセンターはそれら同窓会との連携や支援活動を行っております。フィリピンについては、前号でご報告のとおり、昨年11月に正式に発足したばかりですが、タイ、バングラデシュ同窓会は、設立されて5年になります。毎年の同窓会主催の学術セミナーには、日本から数名の研究者をお招きし、学術交流を図ってきましたが、タイと同様にバングラデシュも政治情勢が不安定であったため、残念なことです。今回はどちらのセミナーにも招へいを見送りました（詳細は、報告をご参照ください）。新年度には、実現できることを祈りたいと思います。

JSPS では、大学の事務局職員の能力開発・国際感覚育成のために「国際協力員」制度を設けております。1年間を JSPS 本部事務局でもう1年を海外センターで研修する制度です。バンコクセンターには、今までその枠さえなかったのですが、今年度（2014年度）初めて派遣が決まり、4月から轟裕美さん（九州大学）が赴任されました。山田大輔・副センター長、ブア・リエゾンオフィサーを入れて4名体制となり、センターの活動も益々活発になるものと思っております。皆様のご期待にそえるよう頑張りますので、よろしく申し上げます。

2014年4月吉日

JSPS バンコク研究連絡センター長 山下邦明

主な活動と目次

1月

8日	マヒドン大学 RT e-Learning Center の Pichit Trivitayaratana 准教授の来訪	P. 3
10日	東洋大学藤井敏信観光地域学部長の来訪	P. 3
20日	キングモンクット工科大学トンプリ (KMUTT) で JSPS 説明会を開催	P. 4

2月

4日	大分大学内田智久助教の来訪	P. 3
6日	在タイ日本大使館主催留学説明会に参加、プリンスオブソクラー大学を表敬訪問及び JSPS 説明会を開催	P. 5
16日	秋田大学教育文化学部高樋さち子准教授の来訪	P. 4
20日	シーナカリンウィロート大学 (SWU) で JSPS 説明会を開催	P. 6
20日	M. Afzal Hossain JSPS バングラデシュ同窓会長の来訪	P. 6
21日	九州大学芝田政之理事・事務局長、大村浩志国際部長の来訪	P. 6
21日	インドネシア・ガジャマダ大学 Irfan D. Prijambada 教授の来訪	P. 7
25日	京都大学柴山守教授の来訪	P. 7
27日	京都大学酒井悠助事務職員の来訪	P. 7
28日	2014 年度 JSPS バングラデシュ同窓会 Bridge Fellowship Program 選考委員会及び同窓会理事会への出席	P. 8

3月

1日	JSPS バングラデシュ同窓会(BJSPSAA)シンポジウム及び同窓会総会の開催	P. 9
4日	2013 年度第 5 回タイ学術会議 (NRCT) 訪問	P. 8
6日	タイ商工会議所大学ビジネススクール Suvaroj Kemavuthanon 講師の来訪	P. 8
7日	京都大学大学院博士後期課程櫻田智恵さん、早稲田大学大学院博士後期課程池田瑞穂さんの来訪	P. 10
8日	静岡大学タイ同窓会設立総会への参加	P. 10
10日	JSPS フィリピン同窓会 (JAAP) を訪問及び Bridge 選考委員会出席	P. 10
12日	大東文化大学山崎俊次副学長の来訪	P. 11
13日	在タイ日本大使館・タイ国元日本留学生教会 (OJSAT) 主催 国費留学生壮行会及び帰国留学生歓迎会に出席	P. 11
14日	JSPS タイ同窓会・Bridge フェロウシップ選考委員会、第 13 回理事会、第 5 回総会の開催	P. 12
18日	福井工業大学金井兼理事長の来訪	P. 12
19日	大阪大学バンコク教育研究センター関達治センター長、望月太郎次期センター長の来訪	P. 13
24日	マヒドン大学を表敬訪問	P. 13
24日	名古屋市立大学システム自然科学研究科松浦康之研究員の来訪	P. 13
27日	九州大学法学研究院五十君 (いぎみ) 麻里子教授の来訪	P. 14
27日	明治大学大六野耕作政治経済学部長の来訪	P. 14
31日	JSPS タイ同窓会 Sunee Mallikamarl 会長及び同窓会理事代表の来訪	P. 14
コラム#1	ブアさんのタイご案内	P. 15
コラム#2	ダイスケさんのダイ好きアジア	P. 16

■ マヒドン大学 RT e-Learning Center の Pichit Trivitayaratana 准教授の訪問 (1月8日) ■



【左から小町さん、Pichit 准教授、センター長】

マヒドン大学 RT e-Learning Center の Pichit Trivitayaratana 准教授、名古屋大学国際開発研究科博士課程の小町友樹エベルチさんが当センターを訪問されました。Pichit 准教授は、ラオス、ブータン、ミャンマー、バングラデシュとの国際 e ラーニングプロジェクトを推進しており、JSPS 及び日本からのプロジェクトに対する協力について相談されました。当センターとしては、拠点形成プログラムや二国間交流事業と行った形で日本との共同研究を行うことに対して支援を行っていることを説明し、申請を検討するとのことでした。

■ 東洋大学藤井敏信観光地域学部長の来訪 (1月10日) ■

東洋大学国際地域学部は、文部科学省グローバル人材育成推進事業の拠点に採択され、「語学力・コミュニケーション能力の向上」「異文化理解・日本人としてのアイデンティティの醸成」「実践的能力の育成」「専門知識の英語による習得」の4つの能力の向上を柱としたプログラムを提供しています。



今回東洋大学は当センターの所在するサーミットタワーに海外オフィスを開設し、当大学が重点施策のひとつに掲げているグローバル人材育成の一環をして活用していく予定とのことでした。

■ 大分大学内田智久助教の来訪 (2月4日) ■



【左からセンター長、内田助教、JASSO 山本所長】

昨年8月に大分大学藤岡利生副学長が当センターを来訪され、東九州メディカルバレー構想にかかる事業説明を頂きました。今回の内田助教の来訪では、その後のフォローアップ及び情報交換を行いました。

先日、大分大学副学長及び医学部長、国際交流課長が来訪し、タイ及びベトナムにおいて関係機関を訪問及び構想推進のための意見交換を行ったとのことでした。特に、在タイ日本大使館では俵一等書記官との議論を経て、現地の優秀な学生をリクルートするために、日本留学試験(EJU)を利用した入学枠の設定について検討を進めるとのことでした。また、大分大学医学部とチュラロンコン大学医学部との学部間学術交流協定(MOU)に基づき、客員研究員の称号付与、教員・学生交流の推進、共同研究を推進することを確認するとともに、今年5年の期限を迎えるMOUの更新についても合意したとのことでした。

■ キングモンクット工科大学トンプリ (KMUTT) で JSPS 説明会を開催 (1月20日)

KMUTT 国際部の主催する「KMUTT Exchange and Scholarship Day 2014」に JSPS の他、日本学生支援機構 (JASSO)、オランダ高等教育国際協力機構 (Nuffic)、ドイツ学術交流会 (DAAD)、オーストラリア政府国際教育機構、Fulbright Program (米国) が参加し、各国の奨学金について KMUTT の学生及び研究者に対して JSPS の事業説明を行いました。

KMUTT は Times Higher Education 紙等の世界大学ランキングはタイ国内で最上位にランクしており (300-350 位)、昨年 12 月に発表された新興経済国ランキングでは 29 位となっており、世界トップレベル大学の仲間入りを目指しています。



【左から Chanchai 国際交流アドバイザー、JASSO Nuntaporn アドバイザー、山本所長、センター長、Buabchamaneer リエゾン・オフィサー、Anak 准教授、副センター長】

今回の事業説明会では、約 60 名の参加がありました。図書館の一角を会場として実施されたイベントは、留学等に関心のある学生が多数参加しました。当センターの説明会には、特に大学側が大学院生や研究者に声をかけて頂いたということで、学生達に混じって教員も参加されました。KMUTT の評価は高いものの、JSPS の情報はまだまだ少ないとのことで、今後も情報提供を活発に行って欲しいとのことでした。

■ 秋田大学教育文化学部高樋さち子准教授の来訪 (2月16日)

2013 年 6 月に当センターがインドネシア・ガジャマダ大学で事業説明会を実施した際に、ガジャマダ大学との共同研究で滞在中だった高樋准教授に初めてお目にかかりました。その後、当センターから、JSPS 二国間交流事業の申請等について情報提供や本部へのコーディネート等の支援を行ってきました。

今回高樋准教授はミャンマーでの調査の途中でお立ち寄り頂きました。インドネシアの活動についてのフォローアップについて、また、当センターが 2014 年度にミャンマーの高等教育について作成するカントリー・レポートにかかる情報収集及び意見交換を行いました。



■ 在タイ日本大使館主催留学説明会に参加、プリンスオブソクラー大学を表敬訪問及び JSPS 説明会を開催（2月6日）

在タイ日本大使館が主催する地方留学説明会は年に四大学で実施されており、JSPSとしては昨年より本格的に参加しています。プリンスオブソクラー大学の日本留学フェアは今回で第7回目の開催となりました。

今回は中川勉在タイ日本大使館公使を代表とし、プリンスオブソクラー大学を表敬訪問し、Dr. Amornrat Phongdara 副学長を代表団との会談を実施しました。

表敬訪問の後、JSPSの事業説明会を実施しました。

プリンスオブソクラー大学研究開発部次長の Dr. Wiphada Wettayaprasit から挨拶頂いた後、JSPSからは、センター長が JSPS の概要説明を、また副センター長が国際連携プログラムについて説明を行いました。また、JSPS 論文博士取得支援事業で論文博士を取得された理学部の Dr. Sirusa Kritsanapuntu 助教、JSPS タイ同窓会理事である薬学部の Dr. Chalermkiat Songkram 助教から日本での研究の経験談について、発表頂きました。申請の方法や自身の研究計画等の具体的な情報提供を行いました。



代表する研究大学であり、具体的な研究開始時期、採択に必要な出版物といった具体的な質問が次々とありました。参加人数は25名と少し少なめではありましたが、30分近くの質疑応答時間があり、積極的に意見交換が実施されました

今回の日本留学フェアは参加機関も多く、東海大学、東京工業大学、明治大学、福井工業大学、JASSO に JSPS と、7 機関が集まりました。今後も大使館、JASSO、日本の各大学との結びつきを強めつつ、JSPS の事業の紹介を積極的に展開していく所存です。

今回のスピーカーではなかったものの、今回のセッションに参加頂いた元国費留学生で外国人特別研究員にも採択された自然資源学部の Sompong Te-chato 准教授、JSPS アジア諸国との拠点大学交流事業で東京大学で研究された Dr. Vannarat Saechan も JSPS のプログラムについてご説明頂き、合計4名の JSPS の事業経験者にご参加頂きました。

プリンスオブソクラー大学は、各種大学ランキングでもランク入りしているタイ南部を

■ M. Afzal Hossain JSPS バングラデシュ同窓会長の来訪（2月20日）

Hossain 会長は Hajee Mohammad Danesh Science and Technology University の元副学長で、JSPS 招へい短期プログラムで1998年に北海道大学で研究を行っており、2013年より JSPS バングラデシュ同窓会長に就任されました。

今回の訪問では、2014年3月に実施されたバングラデシュ同窓会シンポジウム及び総会、また Bridge Fellowship プログラム選考委員会に関する打ち合わせを実施しました。また、今後のバングラデシュ同窓会のあり方について一層の自主自立した運営を行うことを要請しました。



【左から副センター長、今回 Hossain 会長に同行された Khan 氏、Hossain 会長、センター長】

■シーナカリンウィロート大学 (SWU) で JSPS 説明会を開催 (2月20日)

シーナカリンウィロート大学(SWU)は当センターから徒歩5分の場所にある国立大学で、明治大学ASEANセンターも設置されています。今回明治大学江藤賢一教授にご紹介いただき、SWUでの事業説明会を初めて実施しました。



SWUの研究戦略部長のDr. Pathomthat Chiradejaから挨拶頂き、SWUが今後研究大学として成功していくために国際ジャーナルでの出版をより多く行うことの必要性、また今回の説明会を通じて、研究資金に関する情報収集の重要性を説明されました。JSPSは様々なプログラムを提供しており、多くの締め切りが9月頃にあるため、ちょうどよい時期の説明会の実施であり、準備に十分な時間を費やすことが出来るとのことでした。

また、JSPS論文博士取得支援事業で論文博士を取得された歯学部のDr. Sorasun Rungsiyanont准教授から発表いただき、論博の申請の方法や自身の研究計画、日本での研究活動から学んだことなどの具体的な情報提供を行いました。今回の事業説明会には、40名に参加いただきました。説明会終了後、Pathomthat准教授からも、この説明会を通じてJSPSが様々なプログラムを提供し、SWUの研究者の国際化に貢献できることが理解できたため、是非事業説明会を今後も開催するように要請を受けました。



【Dr. Pathomthat Chiradejaによる開会挨拶】

■九州大学芝田政之理事・事務局長、大村浩志国際部長の来訪 (2月21日)



今回のご出張は、九州大学バンコクオフィスの、その事務担当の先生がご病気で事務局担当を辞退されたため、その後任探しに来られたとのことでした。

JASSO山本所長は、文科省で芝田理事の下で働いたことあったこともあり、打ち合わせに加わっていただき、JASSOバンコク事務所の活動についてご紹介頂きました。

【左から副センター長、センター長、柴田理事、大村国際部長、JASSO山本所長】

■インドネシア・ガジャマダ大学 Irfan D. Prijambada 教授の来訪（2月21日）

2013年6月にガジャマダ大学の学長補佐を務める Irfan D. Prijambada 教授の招へいにより、JSPS 事業説明会を実施しました。その後、JSPS 二国間交流事業の申請等について当センターから情報提供や JSPS 本部へのコーディネート等の支援を行ってきました。

今回はバンコク市内で実施された会議の際に、当センターに訪問頂いたもので、インドネシアの JSPS 事業に関するフォローアップ、また前回の訪問時に紹介した JSPS の同窓会設立について意見交換を行いました。Irfan 教授は大阪大学で博士号を取得されており、大阪大学バンコク教育研究センターの関センター長の所にもご案内しました。



【左からセンター長、Irfan 教授、副センター長】

■京都大学柴山守教授の来訪（2月25日）



京都大学は現在 ASEAN 事務所の設立を検討しており、2013年10月24日に三島国際交流担当理事が当センターを訪問されましたが、今回は本格的な現地調査のために柴山教授が来訪され、副センター長が対応し、バンコクの現地オフィスとして JAXA、大阪大学の現地事務所を紹介しました。

京都大学にはバンコク連絡員事務所がありますが、調査研究の拠点という側面が強く、今回の ASEAN 事務所の設立により大学の組織的な連携を推進していくこととなります。

■京都大学酒井悠助事務職員の来訪（2月27日）

京都大学は現在若手職員の海外派遣プログラムとしてジョン万プログラムを実施しており、酒井悠助事務職員は、その一環で今回ブータン医科大学に一ヶ月半滞在し、同大学から派遣されている医師、看護師の秘書業務やブータン医科大学事務の改善支援、次回医療スタッフ派遣のためのニーズ調査を行いました。具体的には、物品の送受やビザの取得の補助、事務改善アンケートを実施し新たな案を提案する、大学や病院スタッフに医療ニーズインタビューを行うなど積極的に活動しました。その後、当センターからの紹介で、日本学生支援機構（JASSO）タイ事務所、大阪大学教育研究センター、京都大学バンコク連絡員事務所を訪問されました。



■ 2013 年度第 5 回タイ学術会議 (NRCT) 訪問 (3 月 4 日)



Busaba Yongsmith JSPS タイ同窓会 (JAAP) とともに、JSPS タイ同窓会 総会の実施について NRCT に協力要請を行いました。NRCT は本会議にオブザーバーとして参加いただくこと、また Kristhawat Nopnakeepongse 事務次長に挨拶いただくこととなりました。同窓会事業について、今後一層 NRCT に参加頂くことを視野に入れています。また、JSPS 事業説明会にかかる支援要請、NRCT Thailand Research EXPO への当センター及び

同窓会の参加、また ASIAHORCs への支援について打ち合わせを行いました。

■ タイ商工会議所大学ビジネススクール Suvaroj Kemavuthanon 講師の来訪 (3 月 6 日)

Suvaroj 講師は日本の政策研究大学院大学で修士号、英国バーミンガム大学で博士号を取得され、JSPS 外国人特別研究員の申請及び日本での研究活動についての情報収集のために当センターを訪問されました。センター長から研究内容や日本での活動も含め情報提供を行ったほか、副センター長からもプログラムの紹介と事務手続きについて説明しました。



■ 2014 年度 JSPS バングラデシュ同窓会 Bridge Fellowship Program 選考委員会及び同窓会理事会への出席 (2 月 28 日)



【前列左から Dr. Haque、Dr. Khondaker 事務局長、Dr. Hossain 会長、後列左からセンター長、Dr. Alam】

3 月 1 日に開催されるバングラデシュ同窓会 シンポジウムに先駆け、Bridge Fellowship Program 選考委員会及び同窓会理事会が開催され、当センターからは山下センター長が選考委員として出席しました。2014 年度の Bridge Fellowship プログラムには、同窓会理事会の積極的な広報活動により 9 名の応募があり、その中からバングラデシュ農業大学の M. Jahiruddin 教授とダッカ大学の A. T. M. Zafrul Azam 教授の 2 名の候補者及び 1 名の補欠候補者を採択しました。申請書類は当センターから JSPS 本部に提出し、5 月頃に採択について最終決定される予定です。

■ JSPS バングラデシュ同窓会 (BJSPSAA) シンポジウム及び同窓会総会の開催 (3月1日)

ダッカ市内 Bangladesh Agricultural Research Council (BARC) において “Education for Sustainable Development” をテーマに JSPS バングラデシュ同窓会第5回シンポジウムが開催され、JSPS バンコク研究連絡センターよりセンター長、副センター長が出席しました。

シンポジウムではまず主催者であるバングラデシュ JSPS 同窓会の Dr. Nur Ahmad Khondaker 事務局長の開会の辞の後、バングラデシュ農業大学元副学長であり元バングラデシュ国家計画委員である Dr Md. Abdus Sattar Mandal 教授による基調講演 “Education for Sustainable Development” が行われ、バングラデシュにおける ESD の活動状況、教育の質保証、高等教育の国際協力について講演を実施されました。



【Mandal 教授による基調講演】



基調講演の後、山下 JSPS バンコク研究連絡センター長が挨拶し、続いて来賓として出席された在バングラデシュ日本国大使館の南博之公使、国連食糧農業機関 (FAO) の Mike Robson バングラデシュ代表、主賓である Yeafesh Osman バングラデシュ科学技術大臣に続き、最後に、JSPS バングラデシュ同窓会の会長である Dr. Md. Afzal Hossain 教授による祝辞がありました。

引き続き、14名の研究者によるテクニカルセッションが実施されました。今回のシンポジウムは、バングラデシュの政情悪化に伴い日本からの講師派遣は見送りましたが、今回バングラデシュに出張されていた九州大学大学院システム情報科学研究所 Dr. Ashir Ahmed 准教授に急遽ご講演頂きました。また、テクニカルセッションの基調講演には、バングラデシュ中央銀行の Dr. Atiur Rahman 総裁を招へいして実施しました。

シンポジウム終了後は、引き続き同窓会総会が行われ、会長による挨拶の後、会計責任者による会計報告及び事務局長による1年間の活動報告が行われた後、同窓会規約改正について議論が行われました。



【Ahmed 准教授による講演】

■ 静岡大学タイ同窓会設立総会への参加（3月8日）

静岡大学のタイにおける協定校は、農学部との研究交流を軸としたカセサート大学、静岡大学タイ事務所を設置しているタマサート大学、またシーナカリンウィロート大学となっています。また1960年代から通算して約80名のタイ人卒業生を輩出しているとのことで、今回の静岡大学同窓会の設立は、一昨年のインドネシアに引き続いて二ヶ国目の海外同窓会の設立になりました。

今回の設立総会では、タイ人同窓生だけでなく、静岡県の日本企業タイオフィスの代表も数多く参加され、大変盛会となりました。同窓会会長には、キングモンクット工科大学トンプリ(KMUTT)の Dr. Pongphen が選任されました。また静岡大学からは、鈴木滋彦・副学長(国際戦略担当)以下10名程度の教職員も来訪しており、静岡大学が今後国際化を大きく推進していくマイルストーンになっていくと感じられました。



■ 京都大学大学院博士後期課程櫻田智恵さん、早稲田大学大学院博士後期課程池田瑞穂さんの来訪（3月7日）



【左から櫻田さん、池田さん、センター長、副センター長、阪大関センター長】

チュラロンコン大学博士課程に留学中の櫻田智恵さん(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士後期課程)と池田瑞穂さん(早稲田大学大学院博士課程後期)がご来訪されました。

JSPSのフェローシップ事業、特に海外特別研究員制度について関心があるとのことで、山田副センター長より紹介・説明しました。また、たまたまオフィスを訪問中の関達治・大阪大学バンコクセンター長より、若い研究者への励ましの言葉をかけて頂きました。

■ JSPS フィリピン同窓会(JAAP)を訪問及びBridge選考委員会出席(3月10日)

Bridge選考委員会には、Dr. Maricar S. Prudente JAAP会長、審査委員のDr. Danilda Hufana Duran、DOST事務次官のDr. Fortunato De La Pena、及び当センターからセンター長が出席しました。今回の募集に対しては3名の応募があり、その中からDr. Ma. Cecilia Galvezを推薦することとなりました。

続いて、同窓会長とフィリピン同窓会活動概要と、今後の活動日程特に同窓会総会及びシンポジウムの日程について議論を実施しました。

その後、在フィリピン日本大使館を訪問し、北川広報文化センター長、加藤専門調査員と面会し、JAAPへの協力を依頼しました。



【左から DOST 事務次官の Dr. De La Pena、Dr. Prudente JAAP 会長、審査委員の Dr. Duran、センター長、副センター長】

■ 大東文化大学山崎俊次副学長の来訪 (3月12日)



【左から JASSO 山本所長、高井准教授、山崎副学長、センター長、島垣事務長】

大東文化大学の山崎俊次副学長、高井宏子環境創造学部准教授、島垣修・国際交流センター事務長が当センターを訪問され、日本学生支援機構 (JASSO) 山本所長と一緒に対応させていただきました。

山崎副学長のお話しでは、昨年度同大学がグローバル人材養成事業の認可を受けたことを受けて、今後東南アジアの大学との交流を通して学生の国際人としての育成を進めていく、その第一歩として、今回タマサート大学との大学間学術交流・学生交流協定 (MOU) 締結に向けての打ち合わせに来タイされたとのこと。

■ 在タイ日本大使館・タイ国元日本留学生教会 (OJSAT) 主催 国費留学生壮行会及び帰国留学生歓迎会に出席 (3月13日)

4 月に日本に出発する予定の国費留学生壮行会及び帰国留学生歓迎会が在タイ日本大使公邸にて開催され、センター長と副センター長が出席しました。

今回は、日本へ行く留学生が 60 名、日本から帰国した留学生 80 名が出席し、これから日本に行く留学生には佐藤重和在タイ日本国特命全権大使より証書と記念品を授与されました。



奨学生を代表して壇上に立ったタイ南部ハジャイの高校生、Yanakawee Siripongvutikorn さんの英語での挨拶が素晴らしく、医学部志望という彼女には、ぜひとも目標達成に向けて頑張っていたきたいとセンター長が声をかけると同時に、日本での研究活動の道として JSPS の奨学金のサポートがあることも伝えました。

本壮行会及び帰国留学生歓迎会は、毎年在タイ日本大使館主催で実施されており、日本にこれから留学する、また留学から帰ってきた学生と各関係機関とのネットワーク形成に繋がっています。



【Yanakawee さんとセンター長】

■JSPS タイ同窓会・Bridge フェローシップ選考委員会、第13回理事会、第5回総会の開催 (3月14日)

バンコク市内 Maruay Garden Hotel にて、JSPS タイ同窓会 (JAAT) 理事会及び総会、Bridge Fellowship 選考委員会を開催しました。

午前中、まず実施された Bridge Fellowship 選考委員会については、最終的にコンケン大学の Dr. Kittisak Sawanyawisuth 准教授が今年度の推薦者に選ばれました。Kittisak 准教授は昨年11月に実施したコンケン大学での JSPS 事業説明会にもご協力頂き、その際に Bridge フェローシッププログラムについても説明頂いています。



13時30分より、総会に先立って同窓会理事会が実施され、同窓会理事の他、オブザーバーとして、NRCT 及び JSPS 齋藤参事が参加されました。15時より実施されたタイ同窓会総会では、日本大使館より長谷川哲夫一等書記官、NRCT より Mr. Krishawat Nopnakeepongsem 事務次長、JSPS 本部から齋藤潔参事に挨拶いただきました。(表紙写真参照)

同窓会総会では、Busaba 会長による JAAT の活動、会計報告が行われたほか、同窓会新会員のリクルート、2014年度 NRCT Research EXPO への JAAT からの出展等について議論されました。最後に、新同窓会理事会メンバーの選出が行われ、Busaba 会長を始め3名が退任して、6名が留任、新たに5名の理事が就任し、合計11名が理事に就任す。任期は Busaba 会長が任期満了で退任したとのことで、1年の予定。JAAT 理事である Dr. Sunee Mallikamarl が新会長に就任されました。



【同窓会新理事】

■ 福井工業大学金井兼理事長の来訪 (3月18日)



【左から松浦所長、橋爪主任、金井理事長、センター長、JASSO 山本所長、笹村主任】

福井工業大学は2013年2月に ASEAN 事務所をバンコク市内に開設し、ASEAN 地域からの留学生受け入れ活動を中心に活動を実施してきました。

今回は、3月15、16日に実施された JEDUCATION FAIR に参加及び協定校の訪問の際に、当センターにお立ち寄り頂きました。若手職員の研修も兼ねた出張とのことで、バンコク等で様々な機関を訪問し意見交換を実施することにより職員の視野を広げることも一つの目的としています。職員の研修の一環として、JSPS の国際協力員制度、当センターの席貸し制度を紹介したところ、理事長からは関心を寄せて頂きました。

■大阪大学バンコク教育研究センター関達治センター長、望月太郎次期センター長の来訪 (3月19日)

大阪大学バンコク教育研究連絡センターは、次年度より大阪大学ASEANセンターバンコクオフィスと名称を変え、新たに活動を実施する予定となっています。

大阪大学バンコクセンターは当センターと同じビルに所在し、関センター長にもよく当センターにお越し頂き、意見交換の実施や打ち合わせにも参加頂きました。バンコクセンターには7年間勤務されており、当センターの歴代のセンター長副センター長も大変お世話になっています。

望月次期センター長は大阪大学文学部哲学科に所属され、2014年4月着任される予定です。



【左から阪大関センター長、望月次期センター長、センター長、JASSO 山本所長】

■マヒドン大学を表敬訪問 (3月24日)

3月末で退職される関達治・大阪大学バンコクセンター長と後任の望月太郎教授とご一緒にマヒドン大学サラヤキャンパスを訪問し、Prof. Dr. Prasit Palittapongampin 研究担当副学長、Dr. Surakit Nathisuwan 国際担当副学長並びにBoonyarat Suwanchinda 国際部長と懇談しました。

大阪大学については、新旧のセンター長交代のご挨拶でしたが、JSPSとしての今回の訪問目的は、マヒドン大学のJSPS ガイダンスセミナーの実施について大学当局の理解と協力をお願いするためでした。運よくイベントの核となる研究と国際担当の両副学長が同席してくれたことで、即座に開催日時がその場で決まり、5月2日(金)にマヒドン大学サラヤキャンパスで実施することとなりました。マヒドン大学には、JSPS 事業を通して日本との関係の深い研究者も多く、セミナーでは、何人かの先生に日本での研究体験についてご講演いただく予定です。



■名古屋市立大学システム自然科学研究科松浦康之研究員の来訪 (3月24日)



松浦研究員は昨年9月の留学フェアで当センターブースにお越し頂き、その際に情報交換をさせて頂きました。(当時の所属は福井大学で、バンコクで研究をされていました)その際に、スポーツ医療をトピックにタイとの共同研究を実施したいとのことで、二国間交流事業、また海外での研究実施プログラムとして二国間交流事業を紹介しました。途中で大阪大学関センター長も加わり、共同研究に関する情報を提供しました。

【左からセンター長、松浦研究員、阪大関センター長】

■九州大学法学研究院五十君（いぎみ）麻里子教授の来訪（3月27日）

九州大学法学研究院が受託されている「大学の世界展開力強化事業」の事業の一環として実施する、九大の学生たちによる「日本文化紹介、日本語教育」のワークショップのタイでの協力実施校について、タイの高校に広くチャンネルのある国際交流基金バンコクセンター（JF）や日本学生支援機構（JASSO）に相談にいられました。平林 JF 副所長、山本 JASSO 所長からは、4 月以降、各地の高校で日本留学のガイダンスを実施する際に、そこでワークショップを実施すると良いのではないかの提案がありました。JSPS からは、チュラロンコン大教育学部の Athapol 先生（昨年の JSPS-NRCT セミナーのコーディネーター）が付属高校で ESD や異文化理解教育のワークショップを実施しているので、それに合流することを提案しました。



【左から JF 平林副所長、五十君教授、センター長、JASSO 山本所長】

■明治大学大六野耕作政治経済学部長の来訪（3月27日）



【左から明治大学江藤教授、センター長、明治大学大六野教授、JF 福田所長、JASSO 山本所長】

明治大学大六野耕作・政治経済学部長が、江藤賢一教授とご一緒に当センターを来訪し、国際交流基金（JF）の福田所長、日本学生支援機構（JASSO）の山本所長を交えて、意見交換を実施しました。シーナカリンウイロート大学の中に ASEAN センターを開設している明治大学ですが、今年からは、タマサート大、チュラロンコン大とも学術交流協定（MOU）を結び、学生を留学させることになっているとのことで、都合 30 名を超える留学生がタイに来るとのことです。

■JSPS タイ同窓会 Sunee Mallikamarl 会長及び同窓会理事代表の来訪（3月31日）

JSPS タイ同窓会（JAAT）新同窓会長の Dr. Sunee Mallikamarl、同窓会新理事の Dr. Danai Tiwawech、Dr. Supavadee Aramvith が当センターを来訪され、当センターからの引き継ぎ及び新年度の同窓会運営について協議を行いました。特に JSPS 同窓会規約について、英語版が不完全だったため、センターで作成した上で同窓会長と確認しました。その他、4 月上旬に開催予定である同窓会理事会の議事について事前議論を行いました。

当センターとしても、Sunee 新会長の元で、心機一転タイ同窓会の支援を実施していく所存です。



【左から Buabchamanee リエゾン・オフィサー、Sunee 会長、Supavadee 理事、Danai 理事、センター長、副センター長】

フアさんのタイご案内



暑くなって来ると私はソクラーンを思い出します。早く水かけられたい！！



バンスクン (Ban Sukun)
実際の生活の中で、亡くなった人を偲ぶ儀式

ロッド・ナム・ダム・ファ
(Rod Nam Dam Hua) 目上の人や尊敬する人を訪れて、手によい香りのする水を注いで祝福したりする儀式



Formation sand pagoda
砂のパゴダを寄進します



道ではパレード
道ではフェスティバルのパレードが。とても長い行列。

もうすぐソクラーン・フェスティバルですね。連休なので、皆さんがこの時期を楽しみにしてみます！！
一年で最も暑い時期、毎年4月13日～4月15日に行われる「ソクラーン・フェスティバル」です。
しかし他の名前は「水掛け祭り」とよく呼ばれて、タイのお祭りとしてはとても有名です。海外からの旅行客を含め、街中ではもうそれは凄い人達でごった返してみんな水をかけ合います。お祭りに参加する人は、水をかけられることを十分覚悟で遊びに行くつもりです。お水かけられても怒るのはダメです！！この時期は、バンコク行きは大混雑。みんな故郷に帰ったりしますが、連休になることから旅行に来る人も多いようです。ソクラーン・フェスティバルは、タイのお正月を意味します。

フア

金曜の夜、バスに乗って (สงกรานต์ที่ชนบท)

夜行 列車は我々の喪われた旅情をかき立てる。しかし、「旅情」という言葉には相応しい英語はあまり無いようで、ウィズダム英和辞典で調べてみたら「Traveler's sentiment」であった。されども決して欧米人が旅情を理解しない訳でもないらしく、バンコク発南の島行きの夜行列車はほぼ8割方欧米人の旅行者だった。ブアさんがお洒落な都会のソンクラーン(タイ正月)を過ごしている頃、僕はラオスの国境に近いルーイ県チェンカーン市ウムン村という田舎の静かな農村で正月を迎えた。今回は夜行列車ではなく夜行バスでの移動だったのであるが。

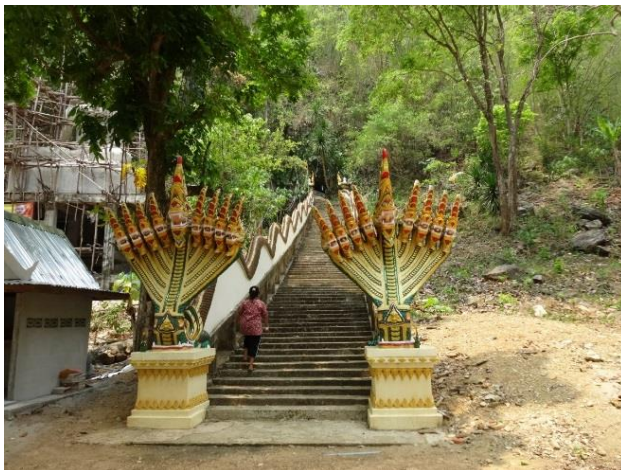


ソンクラーンはいわゆる水かけ祭りである。水鉄砲やバケツで通行人に水をかけたりする風景は田舎でも勿論見られるが、本来のソンクラーンはもっと伝統的で儀礼的なもので、村のランドマークでもある寺院で地域住民と一緒に僧侶に供物を寄進し、新年を祝うとともに厄除けを行い人々の安寧を祈る儀式に参加した。また香水を用いて仏像を清め、僧侶から祝福を受ける儀式も受けた。タイには仏教に基づく文化が根付いており、地域住民の結び付き、僧侶や年長者への尊敬の念

は田舎において一層強いように感じられる。かつてタイでは、水は神聖なものとして汚れを清めて良い将来をもたらすものとして信じられていたとのことである。



その後、村から少し離れた洞窟のある寺院に参拝した。住職であるアート師は、僕が日本人であることを知るや否や非常にきれいな英語でタイやASEAN 諸国と日本や中国との国際情勢やタイの将来など、様々なことを語りかけ、相当の教養を持った方であることが窺われた。少し会話をしただけでも俗世間では相当の栄達を果たしていたであろうアート師がなぜ出家されたのか、どうしても知りたくなり尋ねてみたところ、60歳まで企業を運営した後、俗世間での様々な揉め事を忌避し、これまでの栄達や家族を捨て、仏門の道に入られたとのこと。このような方が一地方の静かな寺院にいたことに驚きと感銘を受けるとともに、師の世界観についてもっと多くのことを学びたいと思うに至った。



JSPS バンコク研究連絡センター学術情報 (2014年1月～3月)

■博士課程教育の質の向上

Dr. Khun Ying Sumontha Phromboon タイ高等教育局長は、タイの高等教育機関の博士課程教育の質について以下の通り述べた。

タイ高等教育局は、高い教育レベルが国の発展の基礎であるため、2014年以降の特に博士課程教育の質の向上に力を入れることを高等教育機関に対して求めている。2011年のデータによると、博士課程コースは、全国の高等教育機関で合計1182課程設置されており、チュラロンコン大学では、133課程で最も多く、マヒドン大学は102課程、コンケン大学は81課程設置している。このうち、科学技術分野が最も人気の高いコースである。

2013年11月11日の高等教育局のデータによると、100以上の博士課程を保有する大学は71機関で、在籍学生数は25,364人と、博士課程を設置する大学が減少していることが推定される。これは、高等教育機関とそのカリキュラムが、求められている水準を満たしていないためである。しかし、今後は、博士課程教育の質の向上のために、高等教育局は、既存の課程の点検と評価を促進していかなければならない。評価の結果、一定の水準を満たさない博士課程は廃止される。

Dr. Tossaporn Sirisamphan 高等教育局事務局長によると、当初は当課題の分科委員会は、高等教育機関とその設置する博士課程を審査することを提案していた。課程の質の審査においては、課程に対する不満の声や、関連する機関内外の指標、過去5年間の大学院での研究の実績、博士課程学生の在籍数が機関のキャパシティに適した人数であるかどうか等が審査項目に含まれる。審査後は、博士課程の教育運営を点検、評価するためのガイドラインが定められる予定である。

(1月15日 タイ教育省)

■職業訓練大学と日本の高等専門学校の連携

Chaiyaphruek Serirak 職業教育委員会事務局長は、理工系の職業訓練大学 (Science-Based Technology Vocational Colleges) の教育の全体像について次の通り述べた。

現在、理工系の職業訓練大学は、国内にチョンブリ校、シンブリ校、パンガー校、ナコーンラーチャシーマー校、ラーンブーン校の5校があり、入学競争率が年々高くなり、優秀な学生が集まっている。職業教育委員会事務局 (OVEC: The Office of Vocational Education) では、これらの理工系の職業訓練校をより幅広く知ってもらうことに力を注いでいる。2013年より、これらの職業訓練

大学は、海外の学校と連携し、教育水準の向上に努めている。

現在、職業教育委員会事務局は、日本の高等専門学校と協力し、グローバルな労働市場で活躍できる人材を育成することに力を注いでいる。テクノロジー分野での職業教育マネジメントの必要性は、国際社会においても認識されている。現在、日本の高等専門学校との協力により、タイ国内の5校の理工系の職業訓練大学に、職業教育マネジメントのネットワークの拡大と、高等専門学校方式の教授法を開発することを目指している。

日本の高等専門学校はこれまで、機械工学、化学工学、海洋学といった工学に関係する教育を行ってきた。職業教育委員会事務局は、5校の理工系の職業訓練大学の教育カリキュラムを、日本の高等専門学校のカリキュラムに沿って作成し、タイと日本の両国において共通する教育カリキュラムを作成しようとしている。これにより、今後、タイと日本の間での教員の研修と学生の交換が可能となるだろう。タイの学生は、ロボット工学の分野において非常に優秀であり、日本の高等専門学校も、ロボット工学の分野に秀でている。そのため、両国の教育機関の連携は、理工系の職業訓練校の発展を促進し、知名度を上げることにつながるだろう。

(1月17日 タイ教育省)

■海外学生インターンシップのための産学共同教育

世界コーオプ教育協会 (WACE・The World Association for Cooperative & Work-Integrated Education) は、学生をインターンシップのために海外へ派遣する計画を推進しており、この実施のために、70大学の教育関係者が協力している。WACEの共同会長を務める Samphan Silpanart氏によると、同組織は、2014年、タイ高等教育局とタイ・コーオプ協会が連携して教育関係者の研修を行った。このプロジェクトは、長期間の産学共同教育プログラムの一環として、学生を海外へ派遣し、インターンシップのプログラムに参加させることが目的である。

※コーオプ教育 (Cooperative Education) とは、大学と産業界が連携し、大学側が主導的に大学の専門教育のカリキュラムの一環として企業等での就業体験を実施するものである。

「国際的な産学共同教育プログラムは、タイの学生が外国人と働く機会を得ることができ、ASEAN経済統合に向けた準備として、とても重要である。この経験によって、タイ人の学生は、異文化の中で自身を適応させる方法を学び、今後のグローバル化による変化に備えることができるだろう」と Samphan Silpanart氏は述べている。

2014年1月半ば、70の大学から100人の教職員が集まり、産学共同教育プロジェクトの理論と実践に関する研修が行われ、参加者は、国際的な産学協同教育プロジェクトの重要性を認識し、このプロジェクトに関わる教育プログラムを企画するための基準と運営方法を理解するきっかけとなった。タイ・コーオプ協会の会長で、元教育大臣のWichit Srisa-arn氏も、この研修に講演者として参加した。

参加した各機関の職員には、この研修で学んだスキルと知識を活かして、このプロジェクトに申請を希望する学生の支援することが期待される。

これまでタイでは、国際的な産学協同教育プロジェクトに参加する学生が大変少なかった。参加学生のほとんどは、南部の大学の学生で、彼らは、共通言語を取得し、コミュニケーションスキルを向上させることを目的として、マレーシアで実施されるプロジェクトに参加していた。しかし、今後は、ASEAN諸国や日本、米国、ヨーロッパなど、学生を派遣する国を拡大させていかなければならない。

(1月28日 タイ教育省)

■2013年以降の研究投資の急増

政府機関によると、国の発展につながるタイ国内の研究への投資額が、今年130億バツ増加し、360億バツとなる見込みである。

科学技術・イノベーション政策局 (STI: The National Science Technology and Innovation Policy Office) によると、研究への民間セクターからの投資は100億バツ増の210億バツで昨年度から55%増となる見込みである。一方、政府からの投資は150億バツとなる見込みである。

これについて、Pichet Durongkaverroj 科学技術・イノベーション政策局事務局長は、National Research Networkの年次会合で「よい兆候だ」と述べた。

タイ研究財団 (TRF: Thailand Research Fund) 所長のSuthipun Jitpimolmard教授によると、昨年のGDPは11兆バツであったが、研究への投資額の対GDP比は、0.24%から0.37%に増加している。

Suthipun教授は、新政府は、研究開発のための予算を少なくともGDPの1%確保し、民間セクターからの投資額は、今後2年間で51から70%まで増加するべきだと述べた。

現在、産業部門で研究開発費が最も多いのは、化学工業部門で36億バツ、次に、食品産業で23

億バツ、石油産業15億バツ、機械工業で13億バツである。

(2月8日 Nation紙)

■ASEAN地域の教育ハブを目指すタイの大学の取り組み

Dr. Thosaporn Sirisumphandタイ高等教育局事務局長は、タイがASEAN地域の国際的な教育ハブとなることを目指すという理念を具現化するためにこれまで行ってきた取り組みについて以下の通り述べた。

タイはこれまでASEAN諸国内での被引用指数のデータベースの開発などいくつかの取り組みを先行して実施してきた。また、ASEAN大学連合の事務局もタイに置かれている。

また、現在、39の高等教育機関が海外の機関と連携し、合計で114の国際共同カリキュラムを創設している。これらのカリキュラムは、他のASEAN諸国の高等教育機関との間に締結した学術協力における覚書に基づいて設立されている。タイの国内の高等教育機関は、ASEAN諸国との間に、カンボジアと34、インドネシアと30、ラオスと32、マレーシアと42、シンガポールと5、フィリピンと33、ベトナムと100の覚書を締結している。これらの覚書に基づき、タイ国内では、344の学士課程、394の修士課程、249の博士課程、30の職業訓練課程があり、合計で1,017のASEAN諸国の高等教育機関と連携した課程が設置されている。

2012年の調査では、ASEAN諸国からタイへ留学した学生は、4,408人で、その内訳は、サーティファイケイトプログラム(特定の科目を履修し、修了証明書を取得する課程)84名、学士課程2,151名、ディプロマコース(特定の専門知識を得るために、必要なコースを履修し、当該専門分野についての資格を得るコース)50名、修士課程1,681名、博士課程323名、その他119名であった。

ASEAN地域の国際的な教育ハブとなることを目指すことにより、タイの高等教育の質と水準を高め、国際的な存在感を高めることができる。さらに、タイの国際社会におけるイメージと役割の向上にもつながる。また、タイの学生がASEAN域内の経済統合に伴う、労働市場での競争に備えて、高い能力を身に付けることにもつながるだろう。

(2月18日 タイ教育省)

■高等教育開発のための民間セクターの参加促進

Dr. Thosaporn Sirisumphand タイ高等教育局事務局長は、高等教育の開発計画に関する委員会終了後に、以下の通り述べた。

タイの大学は、世界に通用する水準となり、高等教育機関において、国の求める人材が育成されるだろう。高等教育の開発計画の中には、民間企業や産業界に対して、研究、教育、学習マネジメント、および学生の育成の面で、高等教育開発へより積極的な参画を呼び掛けることも含まれている。全ての分野の関係者が、高等教育と人材育成の方針を定めるための議論に参加し、その意見を集約したものを新政権へ、実施計画として提出する予定である。

Kamchorn Tatiyakawi タイ高等教育局事務次長は、これに関連し、以下の通り述べた。

産業界での研究は、アカデミックな分野での研究と異なり、研究成果を発表できないものもある。大学での研究分野は、様々な企業と関係性があるため、企業や産業界の高等教育開発への参加を呼びかけるためにはできるだけ多くの産業分野を網羅する明確な規定を定めてから、タイ高等教育機関公務員人事委員会で提案しなければならない。

(2月25日 タイ教育省)

■チュラロンコン大学、マヒドン大学がTHE World Reputation Rankings トップ200に接近

タイの大学は今年の Times Higher Education (THE) World Reputation Rankings においてトップ100に入った大学はなかったものの、チュラロンコン大学とマヒドン大学がトップ200に接近した。

THE World Reputation Rankings の編集者 Phil Baty 氏は、The Nation 紙に対して、タマサート大学を含むほかのタイの大学は、トップ400に入っていないことを明かした。THE World Reputation Rankings は、3月6日に公表され、ランキング100位以下の機関は公式リストには掲載されていない。

THE World Reputation Rankings は、毎年公表される THE 世界大学ランキングから派生したもので、THE 世界大学ランキングが、客観的な13の指標に基づき、大学のパフォーマンスを様々な面から包括的に評価するのに対して、World Reputation Rankings は、世界大学ランキングの評価のうちの2つの指標に基づき作成されている。

THE 世界大学ランキング (2013-2014) では、タイの高等教育機関の中では、唯一、キングモンクット工科大学トンブリ校がトップ350位のグループ

に入った。ランキングに関するより詳しい情報は www.thewur.com を参照。

Baty 氏によると、ASEAN10 か国の中で、タイ、マレーシア、シンガポールの高等教育機関が Reputation Rankings のトップ400位以内に入っているとのこと。

シンガポールについては、シンガポール国立大学が21位、南洋理工大学が91位と、2機関がトップ100位以内に入っている。

日本は、トップ100位以内に5機関が入り、ほかのアジア諸国を大きく引き離している。

世界では、アメリカ合衆国が10位以内に8機関、100位以内に46機関が入り、ハーバード大学、MIT、スタンフォード大学が上位3位を占め、確固たる地位を築いている。

THE World Reputation Rankings での健闘に関連して、2014年のQS世界大学ランキングの分野別のランキングにおいても、チュラロンコン大学が存在感を示している。チュラロンコン大学は、工学分野の化学工学が、51位から101位以内に入った。また、工学分野で機械工学、航空工学、土木工学、また、医学分野で、生物科学、薬学・薬理学分野、科学分野では、環境科学が101位から150位以内に入った。現代言語学分野の、コミュニケーションとメディア学、また、工学分野の電気工学が151位から200位以内に入った。

そのほかの大学では、キングモンクット工科大学トンブリ校 (KMUTT)、マヒドン大学、カセサート大学、チェンマイ大学、プリンスオブソクラー大学では、それぞれ1から2分野が200位以内に入っている。

(3月6日 Nation 紙)

■科学技術開発庁、研究予算の増加要求

タイ国立科学技術開発庁 (NSTDA : The National Science and Technology Development Agency) は、タイ国立科学技術開発庁学会年次大会の機会に、政府が技術研究のための予算を増やすよう働きかけるとのことである。

NSTDA の Thaweesak Koanantakool 長官は、新政府も科学技術の発展のために十分な予算を配分し、持続可能な経済の発展を後押しするためには、特に産業分野と農業分野へのさらなる投資が必要だと述べた。

タイ国立科学技術開発庁学会年次大会「科学技術：持続的開発への原動力」は、Pathum Thani のサイエンスパークで3月31日から4月1日まで開催される予定で、Sirindhorn 王女が開会式に参加する予定である。

Thaweesak 長官によると、多くの民間企業が NSTDA に対して新たな製品の研究開発のための支援を求めてきているが、NSTDA の予算が限られているために、効果的に支援をすることができていないとのことである。

政府は、GDP のわずか 0.1% しか科学技術の研究開発費に充てていないが、今後はより多くの予算を科学技術分野の研究開発費に注入するべきであり、特に、鉄道システム開発の分野での人材育成のための予算が必要であると述べた。

Thaweesak 長官は、国内の老朽化した鉄道システムの総点検を行う計画について指摘し、その業務を担う人材を育成するために、政府は資金を投入する必要があると述べた。

科学技術省は、4 年間をかけて、鉄道関連の産業に関わる機関を設立しようとしてきた。しかし、当該機関の所管について関係省庁が合意に達することができていないため、いまだに設立することができていない。

同年次大会では、食品科学、健康科学や環境に関する科学技術を含む、120 以上のイノベーションが展示され、さらに前上院議員の Somkiat Ornwimon 氏、タイ石油公社最高経営責任者 Pailin Chuchottaworn 氏、タイ商工会議所会長の Isara Vongkusolkit 氏らを招へいして、講演を行うセミナーも開催される予定である。

また、画像や文字をバイクの車輪に表示し、広告媒体として活用する液晶ディスプレイの装置や、医薬品や血液の保存容器内での温度管理システム等、タイ国内で開発されたイノベーションも展示される。

(3月13日 Bangkok Post 紙)

■世界に通用するカセサート大学

2014 年の分野別 QS 世界大学ランキングにおいて、カセサート大学の農林学部が世界ランキングで 48 位となり、この 2 年間で国内の大学の中で最も高いランキングであった。カセサート大学の Wuthichai Kapilakarn 准教授が発表した。2013 年は、カセサート大学は、33 位であった。QS 世界大学ランキングには、学術分野での評価、学長の評価、一論文あたりの被引用数、h 指数に基づいて審査される。重視する指数は、研究分野ごとに異なる。

さらに、以下の 3 領域の 10 の分野においてカセサート大学は、QS 世界大学ランキングのリストに入っている。1、工学と技術領域では、コンピューターサイエンス & 情報システム、化学工学、電子・電気工学、宇宙工学。2、ライフサイエンスと医学の領域では、農林学と生化学、3、自然科学の領域では、化学、環境科学、物質科学がランキングに入った。

カセサート大学は、様々な分野の集結した知の拠点として、世界に知を発信していく立場にあることを誇りとするべきである。さらに、カセサート大学は、全てのタイ国民に対しても知識を広め、国の発展と安定を牽引する高い能力を持った競争力のある人材を育成していくことができるだろう。

(3月14日 タイ教育省)

■タイ国内の 3 大学における ASEAN 経済共同体に向けた先導的な取り組み

マヒドン大学やカセサート大学等の高等教育機関は、2015 年の ASEAN 経済共同体発足に向けて、学生に高い英語力と ASEAN に関する知識を習得させることに力を注いでいる。

マヒドン大学、カセサート大学、タマサート大学の、ASEAN 経済共同体に向けた先導的な取り組みについてそれぞれの大学の学長及び副学長のコメントは以下の通り。

マヒドン大学：

マヒドン大学 Rachata Rachatanawin 学長は先週の学内の「ASEAN のためのタイの高等教育」に関する年次会合で次の通り述べた。

大学は、新しい世代に対して、ASEAN 憲章の根幹となる理念について教えなければならない。マヒドン大学では、ASEAN 経済共同体に向けて長い期間をかけて入念に準備を実施してきた。

若いリーダーは、今後、多種多様な文化的、宗教的背景を持つ人々が共存する社会を構築していくために重要な役割を担うことになるだろう。また、効果的な資源の利用や、ASEAN 地域に繁栄と政治的な安定と幸福をもたらす為に統合を前進させることも期待されている。

ASEAN に関する教材は、全ての科目の中に包含されており、大学のカリキュラムは ASEAN コミュニティのニーズに対応したものになっている。学生の取得する単位のうち 30 単位ほどが ASEAN に関連した教科である。

また、マヒドン大学は、英語力の向上と多文化理解についての授業にも力を入れており、国際医学コース、国際歯学コース、および、医学修士コースを設置している。

マヒドン大学の運営者も他の ASEAN 域内 9 か国の大学と緊密な連携をとり、学生や教員の交流を促進している。

昨年は、マヒドン大学は、ASEAN 域内の学生 250 人、ASEAN 域外の学生 50 人に対して奨学金を授与した。

マヒドン大学は、1学期間、授業を行う客員講師に対しても助成金を提供している。

マヒドン大学は、奨学金のスポンサーを確保することにも成功しており、例えば、現在、ノルウェー政府からの奨学金を得て、60人ミャンマー人の大学院生がマヒドン大学で学んでいる。

マヒドン大学の環境は、ASEAN 経済統合のための準備に向けて前進している。マヒドン大学の戦略は、学生が ASEAN 経済統合に備えるための教育を向上させていくことである。

学生に ASEAN 経済統合や労働市場に備えさせることに加えて、大学は、学生が行動規範や、社会責任、チームワーク、倫理観といったことも身につけているかどうかをケアしていかなければならない。

マヒドン大学を含む、複数の大学は、現在、学生と卒業生に対して、反汚職運動を展開している。

カセサート大学：

カセサート大学の学務担当副学長である Siree Chaiseri 氏は ASEAN 経済統合について以下の通り述べた。

ASEAN 経済統合は、食糧安全保障と食の安全をもたらすだろう。タイの大学は、特に医療と農業の分野における研修を通して ASEAN の政府機関とこれまで連携を図ってきた。

チュラロンコン大学とマヒドン大学が、医療に関する情報を提供しているのに対し、カセサート大学は、農業開発および農業科学、また、食品科学の分野についての情報を提供している。タイの若者は、ASEAN 経済統合に対してすでに敏感になっているが、今後は、経済統合に起因した様々な変化についても深く理解しなければならない。例えば、タイの大学は、ASEAN 域内の人の流動性を促進するために、アカデミックカレンダーをほかの ASEAN の国々に合わせなければならなかった。学生も教員も、このような変化を最大限に活かし、他の地域や国の人々の生活様式や考え方を学ぶ機会とすることができるだろう。

カセサート大学では、ASEAN 諸国へ留学するための奨学金を学生に提供しているが、申請者はゼロだった。一方、韓国、日本、ヨーロッパへの留学の奨学金には多くの申請があった。そのため、カセサート大学は、インドネシアの大学での食品科学を学ぶための奨学金の申請者を、大学側で探し出さなければならなかった。奨学金の受給者は、インドネシアの大学へ留学した結果、食品科学に関する知識とインドネシアでのビジネスの契約を多数得て帰国し、考え方が変わった。

このインドネシア留学の例が示す通り、学生は、自身の考え方を換え、大学は、学生に将来を見据

えて、国を前進させることを教えなければならない。学生は、自分たちが ASEAN 地域を動かす原動力となっていくことを自覚しなければならない。

カセサート大学は、今後も、ASEAN 諸国へ留学する学生に対して、奨学金を支援していく。

タマサート大学：

タマサート大学 Somkid Lertpaitoon 学長は、ASEAN 経済統合について以下の通り述べた。

全ての大学がすでに ASEAN 経済統合に向けて準備を整えている。その一方で、政府は、ASEAN 経済統合に向けた準備をほとんど行ってこなかった。Somkid Lertpaitoon 学長が同大学の指揮を取り始めた3年前から、教育大臣が幾度も変わり、それに伴い、方針も変わった。そして、どの大臣も、ASEAN 問題について取り組んでこなかった。高等教育機関は、国の重要な役割を担っていることを認識しており、ASEAN 問題にこれまで真剣に取り組んできた。

ASEAN 問題には、英語および他の外国語、ASEAN の組織、ASEAN 諸国の文化、そして、タイの高等教育の開発という4つの主な課題がある。

タマサート大学では、すべての学部で、少なくとも二人の英語のネイティブスピーカーを雇用することを求めている。さらに、全ての学部において、少なくとも一つの国際プログラムを設置することも求めている。少なくとも、いくつかの教科で、英語で授業を行わなければならない。

タマサート大学は、「ASEAN の経済」等の、ASEAN に関連する内容をカリキュラムの中に盛り込んでいる。タイの高等教育機関は、潜在力があり、ASEAN 経済統合によって、知識の循環が促されることが期待される。

(Nation 紙 3月17日)

■タイ高等教育公務員人事委員会の開催

2014年3月14日、Chaturon Chaisaeng 教育大臣の議長の下、第1回高等教育局国家公務員人事委員会が開催され、議論の詳細は以下の通り。

1. 国王よりチュラロンコン大学、コンケン大学、シラパコーン大学、マヒドン大学、タマサート大学の7名の准教授を教授職に任命された。(タイでは教授になるためには国王からの任命が必要)
2. 大学の要請に応じた科目選択基準案の承認

大学の要請に応じた科目の設置基準案が委員会で承認された。今後、大学は、以下の基準を考慮して、科目を設置しなければならない。

- 1) 国家経済社会成長計画と政府の方針と一致した学科

- 2) 所得連動型ローンによって定義される主要科目であること
- 3) 人材育成計画に含まれ、かつ、大学協議会で承認された科目であること
- 4) すでに学科が認可されている場合は、需要と必要性を検討し、さらに政府による認可が必須であること
- 5) 大学が新しいカリキュラム設置を計画している場合は、科目は当該機関の戦略に沿ったものでなければならない

大学は、大学協会に承認された科目について、高等教育公務員人事委員会に報告しなければならない。

3. 大学人事部門への規定案へのフィードバック
人事部門に関する規定案について、大学協会、大学、大学教員協会、大学の教育担当者と関連団体からのフィードバックを分析することで国家公務員任用委員会は合意した。

本委員会では、人事部門の規定案に関するフィードバック分析について承認した。本分析は、大学協会、大学、大学教員協会、大学の教育担当者と関連団体によるものである。

人事マネジメントにおいて質の高い基準を持つ大学の中には、当該規定に賛成しない機関もあり、これは、当該規定によって、効率化が悪化したり、人事の流動性や独立性が損なわれることが懸念されるためである。

これらの大学は、人事マネジメント制度を設置している大学については、当該規定に補足規定を設けることで、この規則の対象から除外すよう提言した。
事務局長はこれに対して短期的な解決策を提案し、承認された。

本法案について内閣の承認を得る前に、各大学の役員の問題を解決するための人的資源管理における基本的原則として、事務局長による短期的な解決策についても承認された。

4. 2015-2018年度の大学に対する新しい教職員の
人材配置定員について

ラジャマンガラ工科大学の9つのキャンパスに対する新たな教職員人材配置計画の報告について承認した。

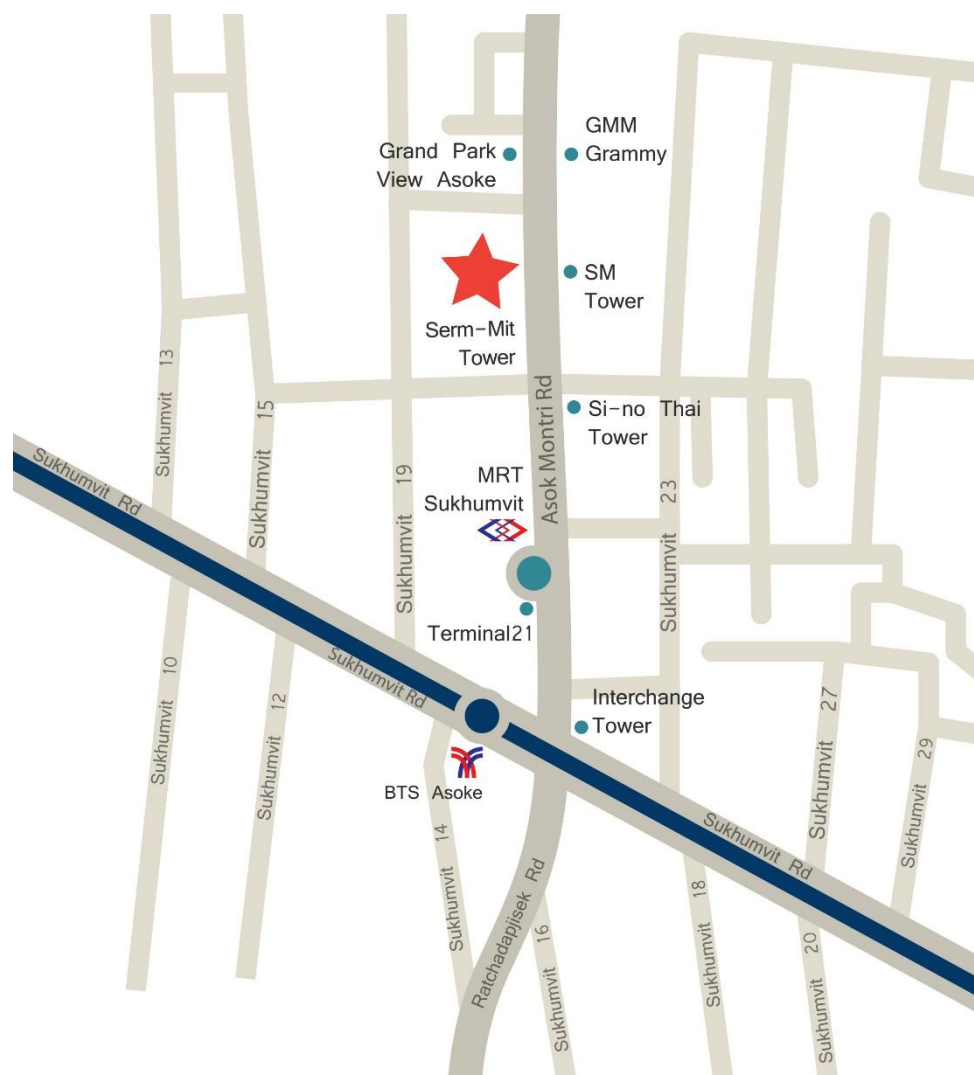
報告書によると、2015年度の新たな教職員定員を提示するためには、他と同様の担当授業時間数計算方法によって業務量を計算すべきだとの見解が示されている。その上で、本委員会では様々なタイプの高等教育機関に合わせ、各大学の新たな定員配置についてシステムティックな調査を実施すべきということ合意された。

職業教育と技術の領域の人材育成に必要な教職員定数に対して、適切なカリキュラムが組まなければならない。

※ラジャマンガラ工科大学：工業大学（工業専門学校）を前身とし、現在は10以上の学部を設置する国立大学。ラジャマンガラ大学タンヤブリー校をはじめ、タイ国内に9つのキャンパスを持つ。
（ラジャマンガラ工科大学ホームページより）

（3月18日 タイ教育省）

日本学術振興会バンコク研究連絡センターの所在地



日本学術振興会バンコク研究連絡センター/JSPS Bangkok Office

1016/1, 10th floor, Serm-mit Tower, 159 Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110, Thailand
tel +66-2-661-6533 fax +66-2-661-6535

Website: <http://jps-th.org> (ホームページリニューアルしました。)

Email: jpsbkk@jps-th.org

■編集後記

2014年4月1日付でJSPSバンコク研究連絡センター着任いたしました轟裕美です。一年間、センター長、副センター長、リエゾンオフィサーとともに、JSPSバンコク研究連絡センターの活動に従事し、国際学术交流に関する見識を広げ、大学職員に求められる国際業務を学びたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

